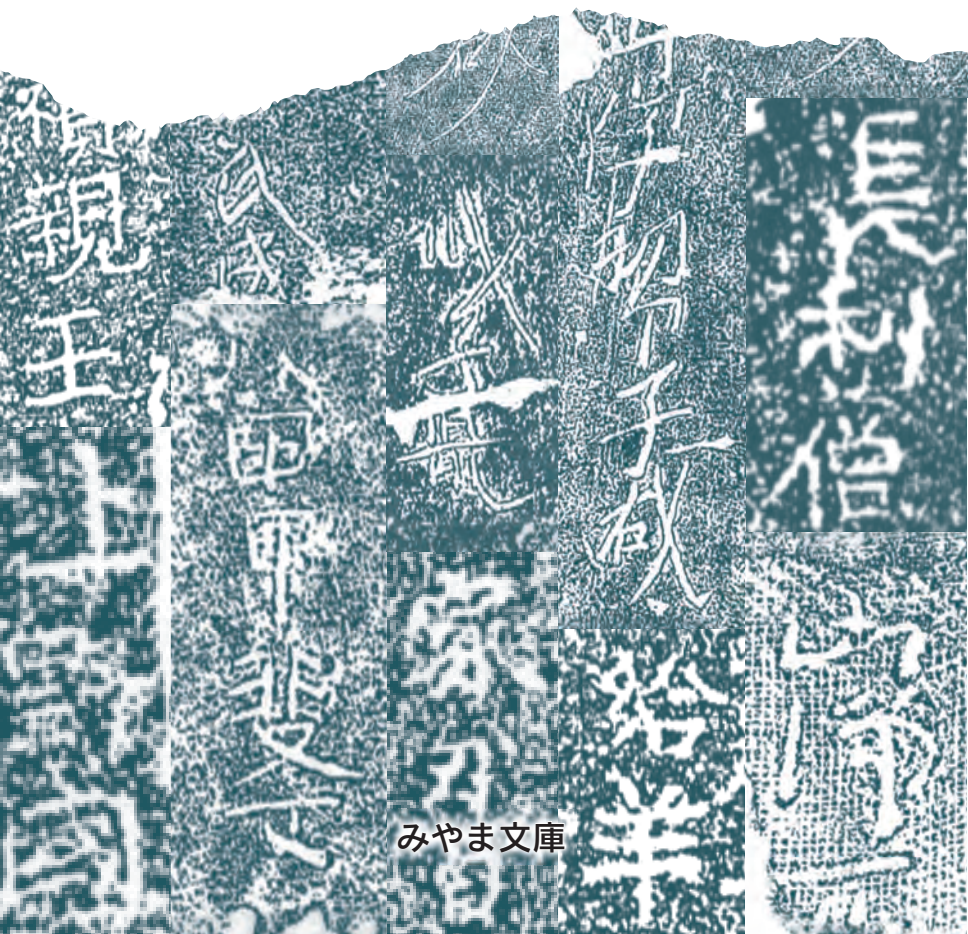


文字から探る 古代の群馬

松田 猛 著



みやま文庫

はじめに

発掘調査によって出土した文字資料は、単独で資料として使えるものばかりではなく、遺跡・遺構の性格や出土状況、共伴遺物等の分析など手続きを踏んで価値が出てくるものであり、古代史研究には欠かすことのできない貴重な資料となっている。

そして、群馬県に関わる古代史料は『群馬県史』資料編4に採録され、古代史研究者のみならず関連領域の方々によって活用されてきた。この文献史料と出土文字資料とが相互に補い合うことによって、古代史の謎が少しずつ解き明かされてきた。

例えば、「芳郷」（口絵参照）や「片岡郡」といった墨書土器や刻書土器は、『和名類聚抄』の郡郷名と連携させて、出土地点とその地域の郡・郷を考える時に大きな根拠となりうるものであり、「国厨」や「曹司」の墨書土器は遺跡の性格を示唆するものである。また、上野国分寺跡出土の文字瓦は、「勢」や「雀」のような、その造営にあたって協力した郡・郷名を記したものがあり、修造時には多胡郡を中心とした「山字物部子成」や「八田甲斐万呂」のように、知識物の寄進者が居住した郷名と人名が書かれているのである。さらに、石製紡錘車にも「八田郷」や「物部郷長」といった地名や氏族名を刻んだものが見つかっている。

ユネスコ「世界の記憶」に登録されて五年目になる上野三碑の一つ山ノ上碑を建立した「放光寺僧」の長利、国司交替の際の不与解由状の草案である『上野国交替実録帳』に認められる定額寺の放光寺。この二つの史料の間には三〇〇年以上もの時間の開きがあり、はたして同一の寺であるかどうか、明らかにできずにいた。ここに、山王廃寺跡の発掘調査で「放光寺」と書かれた瓦が出土し、瓦の供給先を記している可能性がでてきた。また、発掘調査の成果として、山王廃寺は七世紀中頃から一一世紀頃までは存続していて、これは、山ノ上碑の建碑から『上野国交替実録帳』記載の放光寺が定額寺の列から除かれた時期とほぼ一致し、山王廃寺は上野国分寺との密接な関係が認められ、定額寺としての公的な性格も読み取れることから、「放光寺」の文字瓦を介すことによって、二つの史料に見える放光寺は同じ寺を指すものと考えることができた。

さらに、都から遠く離れた東国の上野国に所在する金石文の多胡碑に刻まれた内容は、決して地方のとるに足らない史料ではなく、奈良時代の正史である『続日本紀』の記述と、表現は異なるが内容は全く同じことといっているのである。そして、『和名類聚抄』に記された多胡郡の郷名と上野国分寺跡出土の多胡郡の郷名・人名を刻んだ生の出土資料である文字瓦と比較することによって、多胡郡の地名や氏族に関わる事項の実像を明快に、そして、より深く解き明かすことができるようになった。

このような群馬県に関わる『日本書紀』『続日本紀』らの六国史、国内の各郡郷名を記す『和

名類聚抄』、多胡碑や仁治の碑などの金石文、といった文字で記された史料を、発掘調査で出土した文字資料と関連させて検討を加えてみた。後世、人の手が加わった編纂史料である六国史などに対して、発掘調査で出土した文字資料は、書かれた時の正に生の資料である。本書ではこれらの文字が書かれた史・資料をもとに話を進めていく。

宮都などから出土する木簡は膨大な情報量をもたらしてくれるが、群馬県においての出土はほとんどなく、平城宮跡などから上野国関係のものとして目にするのができるくらいである。地方においては、土器や瓦に記された墨書土器、刻書土器、文字瓦が中心となっている。また、本県では石製紡錘車に線刻されたものが多数出土しているのが大きな特色である。このうち、本書では上野国分寺の修造に際して、多胡郡の各郷に居住する人々から寄進された瓦に記された文字を中心に取り上げた。

歴史に関心を持つ多くの方々が、史料と資料との文字を関連させて古代史を解き明かしていく妙味を感じていただけたら幸いである。

目次

はじめに

一 六国史

1	五・六世紀の上毛野とミヤケ	5
2	多胡郡の建郡と多胡碑	12
3	上西原遺跡と上野国分寺	20
4	緑野寺一切経と最澄の来訪	32

二 『和名類聚抄』

1	片岡郡の成立とその意義	43
2	多胡郡の郷と上野国分寺瓦の生産	54

3	多胡郡山部郷と避諱	76
4	甘楽郡宗伎郷とソガ部	86

三 金石文

1	多胡碑の「穗積親王」と文字の音通	103
2	山ノ上碑の「佐野三家」と知られざるミヤケ	113
3	史料に見える二つの放光寺	126
4	金井沢碑の「群馬郡」と「三家子□」	147
5	仁治の碑にみる古代氏族	156

	あとがき	167
	主な参考・引用文献	170
	著者略歴	175